近海漁業資源の家魚化システムの開発に関する総合研究（抄録）

放流適期及び放流場の選定基準

吉尾二郎・梶　明広・高橋伊武

MRP第Ⅱ期のまとめとして、昭和58～60年のイタヤガイ放流追跡結果から、放流群別の移動・成長・生残を検討した。

詳細については、大型別枠マリーンランチング計画（イタヤガイ・アカガイ）プログレス・レポート（6）、日水研を参照されたい。

要　　約

移　　動

昭和58・59年、敬川・大社に放流した中型貝以上（$\overline{SL}$、47.5㎜）の個体は放流地点に居残ることが確認された。しかし、昭和60年に放流した小型貝（$\overline{SL}$、10～60㎜）は、中型以上の個体が多数含まれるにもかかわらず、放流域での居残りが確認されなかった。この原因としては、“同サイズでの重量差”、“放流時期”の二つが考えられた。

成　　長

中型貝の放流後の成長は、放流（秋）から翌春までは著しく、その後は停滞した。一方、大型貝で放流した場合、中型貝に較べ成長速度が鈍いことが確認された。

生　　残

中型貝の生残は、放流（秋）から翌夏までは高率で推移し、夏期から秋期にかけて急激に低下した。大型貝についてもこの傾向は同様に認められ、両者とも、越夏が生残率低下をもたらす最大の要因と考えられた。